

雨待ち

1. マイマイ

梅雨の季節、喜んでいるのはカタツムリでしょう。一番個体数の多いのはセトウチマイマイ(No.43 雨の後で 参照)で、2番目がサンインマイマイ(No.85 規則性 参照)です。今回は殻径1.5cmくらいの中型種を取り上げてみます。微小な種は落ち葉めくりをしなければ目につく機会はまずありません。



コウダカシロマイマイ

コウダカシロマイマイは厚い殻が乳白色をし、黒い小斑点がみられることから識別は容易です。公園地域のような人工物の多いところで雨後によく見ます。石やコンクリートに出てきていることが多く、カルシウムを求めていると思われます。乾燥しているときは、隙間や落ち葉下に隠れて気づけません。中国地方の山地に生息する種で、殻底に黒い帯のあることも特徴です。



ニッポンマイマイ



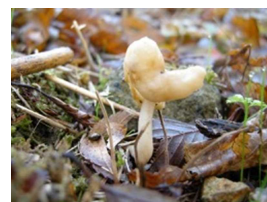
ヤマタカマイマイ

ニッポンマイマイも同じくらいの大きさですが、薄い殻は黄褐色で殻高が高く、螺塔の中央が膨らんだ形に特徴があります。軟体部を伸ばしたときは写真のようにかなりの長さになります。草や木の葉の低い場所で見られますが、ヤマタカマイマイの若い個体が同じような色・形をしています。同じ

くらい大きさでも、ニッポンマイマイの成貝は殻口が厚くなって少し外側に反っていますが、ヤマタカマイマイの若い個体は殻口が薄く外側に反っていません。軟体部もよく似ていますが、識別できます。

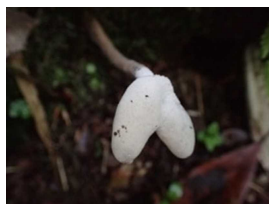
2. アシボソノボリリュウタケ

種名は「昇り竜」の意味と思われます。長い柄の上の頭部が二つに別れた鞍形になっているところを口を開けた竜に見立てられたのでしょう。シイタケのような私たちが通常考えているキノコとは大きく異なり、胞子が袋(子嚢)に入っている子のう菌類という仲間です。シイタケの仲間は担子菌類といい、胞子は傘の下側にあるヒダに裸でついています。ノボリリュウタケの柄や頭部の内部は空洞で、子のう菌類に共通です。



アシボソノボリリュウタケ

ノボリリュウタケは頭部の上面に子嚢ができ、中で胞子が成熟すると白く見えるようになります。ちょうど梅雨の時期ですから、上方の木々についた雨が水滴となって落ちてくると胞子を飛ばすことになるのではないかと想像します。現場に遭遇したことはありません。ショウロの仲間のホコリタケでは水滴が袋に衝突すると中の胞子が袋の口から飛び出すといわれていますから、ノボリリュウタケでもあり得るでしょう。餅につくアオカビも子のう菌で、触ると飛ぶところは同じです。

胞子で白くなった
子嚢盤

柄が太くて縦筋が何本もあるノボリリュウタケは、ヨーロッパでは加熱して食用にするのですが、柄が細くてなめらかなアシボソノボリリュウタケは、食用になりません。遊歩道の法面で見るのは、アシボソノボリリュウタケばかりでノボリリュウタケを見たことはありません。